

～ セピア色の風景 ～

青田 茂雄

仙台建設業協会専務理事

「トラクターと親父」

人馬による農作業の時代は、稲刈りの後も翌春の田植えまで、間断なく作業が続いていた。

コンバインが登場する前、手刈りした稲束は天日干しをした。相馬では、木杭と竹竿で作られた段々上の棚組（「ハセ」と呼んでいた）に稲束を、稲穂を北側にして斜めに重ねて干した。稲穂を雨に濡らさぬようにしたのだろう。

その棚組も片付けられ田んぼが乾いた頃、年末から始まるのが馬に引かせた馬耕（ばこう）である。その馬耕で、人馬一体となつて田んぼを往復し土を起こした。さすがに馬も到達点の土手の草を食（は）み休みたくなる。怠け馬はしょっちゅう休もうとするので、口に金網状のマスクをさせられることもあった。馬耕の後は、土塊をさらに小さくする作業（作業名は忘れた）があった。冬が来る前

にこの作業を終えておくと、寒さで土塊が凍り春先の暖かさで砕けた。4月になると田んぼに水を引き、代かき作業で人馬一体、泥だらけになつて田んぼ内を何往復もした。

昭和30年代後半になると耕運機が急速に普及した。1年ごとに耕運機が増え、馬が姿を消していった。ある年、馬で作業するのはとうとう親父一人になった。田んぼの広い平野で、親父を見つけるのは遠目にも容易になった。「どうして耕運機を買わないの」と問う声が、子どもの私にも聞こえるようになった。同時期、親父が農業機械の資料を眺めメーカーの人と相談するようになった。その頃、親父が「今に見てろー」とつぶやいたのを覚えている。

そしてその「今」の日がやってきた。県道の小学校前まで、トレーラーに載せられた村初めてのトラクターが現れた。

そこからわが家までの小道には大型のトレーラーは入れない。そこでトラクターは降ろされ、「ダッ、ダッ、ダッ」と聞き慣れないエンジン音が集落到響きわたり自宅まで自走し、私は誇らしく後を追った。

トラクターは、従来の耕運機より作業効率は数段上回り、しかも田んぼに降りることなく乗用で作業ができる。当然、自宅とたんぼの往復もクルマ同様乗用で。村ではわが家の作業を見た翌年より、トラクターがどんどん増えていった。そして多くの耕運機は、農家の納屋の隅で寝込んだ。

寒風の中親父は、手綱をさばきながら馬の背の向こうに、将来を見ていた。

●あおた・しげお 1956年生まれ。福島県相馬市出身。2016年5月から仙台建設業協会の専務理事を務める